

通信制・第一学院高⇄ネパール

絵手紙で国際交流

金沢の高校生とネパールの子どもが絵手紙の交換を通じた交流を始めた。絵手紙を出したのは通信制の第一学院高金沢キャンパスの生徒約60人で、橋渡し役となった元陸上自衛官の大場淳治さん(62)＝長野県池田町＝を経て、ネパールの孤児施設を利用する4～18歳の子どもから23日に返事を受け取った。互いの暮らしや夢を絵と文字でつづり、遠い地にできた新しい友人と心を通わせた。



生徒にネパールの文化を紹介する大場さん(右)

＝堀川新町の第一学院高金沢キャンパス

大場さんは自衛官現役時の1993年にボランティアを始め、カンボジアで地雷除去に取り組んできた。現地住民との触れ合いの中で、地雷によって脚や親を失った子どもの存在を知った。

彼らの心を癒やしたいと2014年に絵手紙を通じた交流を本格化させ、地元にある通信制の第一学院高長野キャンパスに協力を仰いだ。その後、エリアをネパールに広げたがコロナ禍で中断し、再開にあたり金沢キャンパスからも参加の申し出を受けた。

金沢キャンパスの1～3



届いた絵手紙を受け取るネパールの子どもたち
＝5月(大場さん提供)

言葉、文化の違い超え 長野・大場さんが橋渡し

年生はアニメのキャラクターや草花のイラストに加え、調べたネパール語で近況や趣味、頑張っていることなどを書き留め、キーホルダーや鉛筆も同封して大場さんへ送った。

5月18日から9日間、ネパールに赴いた大場さんは、チベット僧院の孤児施設に絵手紙を届けた。笑顔を浮かべながら手紙を読んだ子どもたちも英語やネパール語で返事を書き、手作りのミサンガや折り紙と共に大場さんに託した。

23日、堀川新町の金沢キャンパスで開かれた報告会で、大場さんは現地の様子を紹介し、返事の絵手紙を生徒に渡した。大場さんは「価値観や境遇を見つめ直すきっかけにしてほしい」と話した。

「将来は教師になりたい」と書かれた手紙に目を通した田中蒼人さん(1年)は「相手の顔は分からないけど、この子の夢がかなうよう願っている。自分も消防士の目標に向かって頑張りたい」と語った。

金沢キャンパスは今後も大場さんと共にネパールとの文通を重ねる。